

氏名(本籍)	金峻現(大韓民国)
学位の種類	博士(体育科学)
学位記番号	甲第109号
学位授与年月日	令和4年3月15日
学位授与の要件	文部科学省令学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	An epistemological transition from competition against others to victory, defeat, and excellence in competition against oneself
審査員	主査 日本体育大学 教授 関根正美 副査 日本体育大学 教授 石井隆憲 副査 日本体育大学 教授 依田充代

### 《論文審査結果の要旨》

本研究の出発点は、古代オリンピックにもみられ現代スポーツにおいてドーピング、暴力、八百長試合などとして現れている非倫理的な行為の存在への疑問である。スポーツは人間形成をはじめとして社会的に価値があると見なされる一方で、非倫理的行為はスポーツ世界に絶え間なく現れる。このような非倫理的行為が生み出される地盤がどこにあり、それを克服するための思想は可能であるのか。これが、本論文の問題意識である。

これまでスポーツの倫理的問題に対しては他者との競争が勝利至上主義を生み出すとの指摘とともに、「相互の卓越性の追求」(mutual quest for excellence)をスポーツの本質とする思想が提示されてきた。これらスポーツ哲学の研究史において提示されてきた思想に対して、金氏は序論において二つの問題点を指摘している。第一に従来の研究は他者との競争を想定しているためスポーツにおける自己との競争に関する事象の存在を説明できていない。第二に卓越性の追求は誰にでも可能とされてきたが、様々な競技スポーツにおける卓越性の存在根拠ならびに敗者がどのような卓越性をなし得るのかについて明らかにできていない点である。以上の先行研究に残された課題をもとに、本論文は自己との競争における勝利と敗北の存在を明らかにすることで競争における敗者を含めた誰もが達成しうる卓越性の存在を明らかにするとともに、他者との競争から自己との競争への認識論的転換を示すことを目的としている。

本論文の概要は以下の通りである。

第1章は序論とされ、問題の所在、先行研究の総括と課題、研究目的、用語の定義で構成されている。第2章ではハンス・レンクの形式的フェアプレイと非形式的フェアプレイの概念を使って自己との競争からもたらされる敗北の存在を明らかにしている。これはゲーム構造および他者との競争から生み出される敗北とは異なり、自己との競争からもたらされる非倫理的行為の結果としての敗北である。敗北が存在するためには勝利の存在が不可欠であることから、第3章において自己との競争によって生み出される勝利について明らかにされる。第3章では、新体操の選手であったソン・ヨンジェの実例を用いて自己との競争における勝利VICA0 (victory in competition against oneself) の概念が三つの観点により明らか

にされている。一つは彼女の記録とパフォーマンスが4位という客観的な結果にとどまらず、パフォーマンスの向上という自己との比較を通じての卓越性である点。二つめは、身体的な卓越性に基づき彼女自身がVICAOであると認めている点。三つ目が構成的ルールを守ることを条件とし競技の過程と勝利への手段を自己肯定できている点。以上、3つの観点からVICAOの成立条件が明らかにされ他者との競争に関係なくすべての人が得ることのできる点から、VICAOをスポーツの非倫理的傾向を緩和するための選択肢として提起している。第4章ではVICAOの議論を受けて、スポーツにおける卓越性の成立条件を他者との競争だけでなく自己との比較という観点から明らかにした。スポーツの競争及び卓越性に関する先行研究では卓越性の追求は誰にでも可能である点が指摘されているものの、その条件について示されてこなかった。この点に対し、第4章では、対戦相手に直接影響を与えない競技 (unencumbered competition) において他者と比較することで得られる相対的卓越性ととも、個人的卓越性が自己の過去の記録を克服することで達成される点を示した。結論として、自己との競争という観点に基づいてスポーツの競争には他者との競争で価値づけられるのは別の勝利、敗北、相対的卓越性、個人的卓越性が示されている。そしてこれらが他者との競争によって起こされるスポーツの非倫理的傾向を緩和する認識の一つの選択肢として、示された。ただし、その範囲には成立条件に基づく制限があり、あらゆるスポーツ現象や選手に適用可能ではない点が述べられた。

以上の内容に対して質疑応答がなされた。質疑の内容としては、構成的ルールに違反したときの自己意識をめぐる問題、VICAOが成立する具体的な事象の範囲についての問題、種目の違いの確認、自己との競争という認識論的転換が実際の指導場面に適用できるか、なぜ形式的フェアプレイを構成的ルールのみ限定したのか、規制的ルールをなぜ含まなかったのかなどの問題である。これらに対して申請者の金氏は概ね的確に答えている。審査員から今後の課題として、VICAOについて個人種目や集団種目の部分的なプレイ場面だけでなく集団種目そのものへの応用可能性が指摘されたが、本論文の論旨に変更を迫る論点ではなく、今後の課題と判断される。本論文は全体的に厳密な概念規定によって瑕疵のない論理構成がなされており、他者に対する勝利を価値とするスポーツ観の転換を迫る点に意義が認められる。とりわけ、自己との競争における勝利 (VICAO) の概念を明確化し、他者との競争による勝利では説明できないスポーツの卓越性の条件を示した点に学術的意義が認められる。

以上、審査の結果、金峻現氏は博士(体育科学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

## 《最終試験結果》

合格 ・ 不合格

2022年1月18日